



デジモンテイマーズ

第41話

帰還

リアル・ワールドへ！

第二稿

脚本ノ小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

2001ノ09ノ17

登場人物

松田 啓人(10)	ギルモン
李 健良(10)	テリアモン
牧野 留姫(10)	キュウビモン
加藤 樹莉(10)	クルモン
塩田 博和(10)	ガードロモン
北川 健太(10)	マリエンジェモン
李 小春(07)	ロップモン
秋山 遼(14)	サイバードラモン
	同・成長期
	インプモン

Hypnos Team

山木満雄(32)	ネット管制室長
鳳 麗花(26)	チーフ・オペレーター
小野寺恵(23)	オペレーター

Wild Banach

ドルフィン「ロブ・マッコイ」(50)	ノバベル(36)
デイジー(40)	ノカーリー(43)

Parents

松田 剛弘(41)	タカトの父親
松田 美枝(35)	タカトの母親
李 鎮宇(40)	ジェンの父親
李 [^] 柳瀬 ^v 麻由美(42)	ジェンの母
牧野ルミ子(28)	留姫の母
秦 聖子(49)	留姫の祖母
加藤 肇(46)	樹莉の父親ノ小料理屋板前
加藤 静江(33)	樹莉の母(後妻)
加藤 昌彦(3)	樹莉の弟
塩田博文(38)	ケンタの父親ノ北川駿介(48)
塩田貴子(39)	ケンタの母親ノ北川明美(43)

急行アルプス車掌

アバン・タイトル

N 「デジタル・ワールドを無の世界へ変える存在、デ・リーパーに立ち向かう為、クルモンは進化の輝きを全てのデジモンに放った。李鎮宇達が世界の人々と協力して送った方舟・アークに乗ってタカト達はリアル・ワールドへ帰還しようとしていた。しかし——」

前話リプライズ／物理レイヤーの荒野

軌道を通ってアークが現れた！

ジエン「アークだ！」

タカトらの前に現れ、スローダウンさせながらリア部ハッチが開く。

タカト「でも！ まだ留姫とレナモンが来てないよ！」

サブタイトル

物理レイヤーの荒野／夜

ゴゴゴゴ。アーク、小走りで追いつける程の速度。

ヒロカズ「おいどーするよ！」

ジエン「小春！ とにかく先に乗って！ みんなも！」

ケンタ「ヒロカズーっ、加藤を乗せようよ！」

ヒロカズ「おしっ、ガードロモン、手伝って！」

ガードロモン「オッケー」

次々と乗り込んでいく子ども達。

ギルモン「タカトお」

タカト「ギルモンも乗ってて！ お父さんと約束したんだもの！

絶対帰ってギルモンパン食べるって！」

ギルモン「うん……」

ジエン「（苛立ち）どうしたらいい！ 留姫——！」

遠くの荒野／未だ昼間

疾走するキュウビモン。上には留姫と、インプモン。
留 姫「——バカだよ……」

インプモン「……（意識混濁）」

ぐおん！ 夜が通過していった！

留 姫「（はっ）夜になっちゃった……」

キュウビモン「留姫！ 私に力を！」

留 姫「！」

サツと抜く高速プラグインBカード。

アーク内（描写はデザインにより適宜変更してください）

クリスタルの部屋。子ども達とデジモンが入ったら
それでいっぱいになるくらい。クリスタルの向こう
側は半ば透けて見えている。

ヒロカズ「加藤、平気か？ もう帰れっからな」

樹 莉「……」

クルモン「ジューリ？ どうして何も言わないんですか？」

アークの低い唸り、少しずつ高まっていく。

小 春「わー、速くなった速くなった」

ロップモン「急ぐなり！」

同外

タカト「どうしよう！ もう昇り始めた！」

見上げるタカト。軌道は弧を描いてリアル・ワールド
ド球へ伸びている。

テリアモン「（ジェンの頭上で）ジェーン、僕、見てこよっか」

ジェン「君も乗ってる！」

ジェン、テリアモンを中へ放る。

テリアモン「わぁ〜（呑気に）」

リヨウ「俺が見てくる！ サイバードラモン！」

サイバードラモン、羽根を広げ、リヨウを肩で掴ん
で飛び立つ！

ジエン「頼んだぞ！」

少しづつ遅れていくタカト。

タカト「くっ、はっ……わっ！」

石に躓き転ぶタカト。

ジエン「タカトっ！」

その時、アークは機首を上げ、上昇し始めた！

アーク内

ヒロカズ「うあっ！ もう飛び立つのかよ！」

後部から落ちそうになるヒロカズ達。

ガン。それを両手を伸ばして止めるガードロモン。

ギルモン、必死にアークの中を見回し訴える。

ギルモン「止まって！ ねえ止まってよ！ まだタカトたちが来

ないんだよ！ 止まってよ！」

ケンタ「これ、船なんだから聞かないよ！」

ヒロカズ「タカト！ 早く乗れえええ！」

ネット管理局／管制室

ヒュプノスにアークの軌道が描かれている。

鎮 宇「よしっ！ アークが戻ってくるぞ（インカムに）カーリ

ー、軌道補正を頼む」

カーリー「（無線／オフ）了解。もう少しね、タオ」

山 木「（不安／呟く）全員無事、なのか……？」

地下R&Dセンター

複数の端末を行き来するワイルド・バンチ達。

ドルフィン「——分散コンピューティングでここまでの事が出来るとは……。この世界はまだまだ見捨てたものじゃない」

模式図

虚空に停止したアークから飛び下りてくるギルモン。

ギルモン「（テリアモンを頭に寄せ）ターカートオ！」

テリアモン「ジエン」

タカト「止まった……」

と、遠くよりリヨウの声。

リヨウ「（遠くオフ）おい！」

ジエン「（ハツとなって振り向く）——来た！」

凄まじい土煙上げ、轟進してくるキュウビモン。

その上空を低空で飛ぶサイバードラモンとリヨウ。

タカト「——（微笑）留姫」

地下R&Dセンター

カーリー「デージー！ どうなってんのこれは？」

デージー「（首を振り）判らない……。アークの人工頭脳が勝手

な判断をしたとしか」

山木「（オフ/無線）プログラムの暴走ですかっ？」

ドルフィン「——アークのプログラムは、私が書いた……」

山木「——どういうプログラムだったんです？」

ドルフィン「（苦笑）デジモンのコア・プログラムだよ。既に我

々にとって未知なる世界で、不測の事態に対応し得るも

のはそれしかないと考えたからだ……。しかし何故……。

デジモンとしての意志や自我までは持っていないのに」

物理レイヤーの荒野

飛翔するキュウビモン。タカトらも乗せ、アーク後

部へ飛び込む！ 続くサイバードラモン。リアのデ

ータ圧縮ゲートを通ると、キュウビモンはレナモン

に、サイバードラモンは成長期の姿に。

デジタル・サイン「Data Archived」が浮かぶ。

ややして——、後部ハッチが閉じ、上昇を再開。

アーク内

ヒロカズ「おせーよ！　　ったく女子はよー……」
ケンタ「あっ、こいつ……」
ヒロカズ「え……」

レナモン、傷ついたインプモンを抱いている。

ヒロカズ「——留姫、こいつが何したか判ってんのか」

留姫「——（頷く）」

ヒロカズ「——（緊張を解く）判ってて、連れて帰りたいっつー

んなから、ま、しょーがねーけど」

ガードロモン「しょーがねーよな」

ヒロカズ「おい、俺の真似すんなよ」

ガードロモン「真似なんかしてねーもん」

マリンエンジエモンの声「ぴーぴーぷー」

ケンタ「ん？……ああッ！」

ヒロカズ「どしたよケンタ——あッッ！」

マリンエンジエモン、ケンタの肩の上で、いつの間にか現れたDアークで遊んでいる。

物理レイヤー上空

軌道に乗って、リアル・ワールドに向かって進んでいくアーク——。と、そのアークを周回し、デジノームが一体、笑いながら何処かへ飛び去っていく。

管制室

再び動きだしたアークのグリッド。

鎮宇「動いた。再び動きだした！　軌道を再計算してくれ！」
山木「——デジモンのコアを持った、船——（思案）」

アーク内

マリエンジェモン、Dアークをケンタに手渡す。
ケンタ「——そっか……。マリエンジェモンが俺のパートナー
だったんだ……。 (嬉しい) 」

ヒロカズ「ちつちえー……。」
ケンタ「(むっ) これでも究極体なんだぜ！」
ヒロカズ「……こいつは失敬……。」

ジェン「——そっか……。レナモンは、インプモンを探して……。」
タカト「——でも、良かった。間に合って……。」

留 姫「(ぎこちなく、笑み) ——ごめん」
ぐんぐんと物理レイヤーが遠ざかっていく。
見上げるタカト。

機首は、六つの階層を突き抜け、どんどんと上昇。
横たわるインプモン、薄目を開け——
インプモン「——いいのかよ……。？ 俺なんかが帰っても……。」

地下R&Dセンター

モニタをワッチし続けるデイジー。

デイジー「(抑えて、しかし力強く) 頑張るのよアーク！ もう
少しよ！ 子ども達をこの世界に返して！」

ドルフィン「——(祈る様に目を閉じる)」
バベル「軌道がズレた。リアライゼーション・ポイント、マイナ
ス114」

管制室

鎮 宇「トレースを頼む！」

恵 「了解。修正軌道、出ます」
地図がヒュプノスに浮かぶ。新宿中央公園。

山 木「麗花！ 子ども達の家族に変更場所を知らせてくれ！」
麗 花「——(やや微笑) 了解」

アーク内

中階層の厚みで見えなくなっていく物理レイヤー。

テリアモン「——、四聖獣達、大丈夫かな……」

ジエン「——彼らの力を信じよう。だって、デジモンの神様なんだから……（信じきれない声）」

ギルモンは機首部近くで勝手に喋っている。

ギルモン「——でね、ぼくたちすごい大変だったんだよ」

タカト「（来て）誰と話してるの？」

ギルモン「ん、アーク」

タカト「え、でも……」

ギルモン「アークはね、ギルモンのお願いをちゃんと聞いて、止まってくれたんだよ」

タカト「へえ……、すごいや……、ギルモン、アークも……」

アーク、ありがとう！」

特に反応はしないアーク。

下を見つめている留姫に、リョウ、近づき

リョウ「君たちのお蔭で、俺も一年ぶりくらいに帰れる」

留姫「この親不幸者」

リョウ「（ニヤ）お互いさまだ」

小サイバードラモン、テリア、ロップと遊んでいる。
クルモンを抱え、穏やかにそれを見ている樹莉。

タカト「——加藤さん……」

樹莉「（じつとタカトを見つめる）」

タカト「ホントに、大丈夫？」

樹莉「——」

クルモン「（困惑）くるる〜？」

ガクン！ スローダウンするアーク。

ジエン「どうした？」

ギルモン「ねえ、光の道がもうなくなっちゃったよ、タカト」

タカト「ええっ……」

地下R&Dセンター

カーリー「何て事！」

ドルフィン「何が起きた」

バベル「軌道が消された」

デイジー「誰による」

バベル「判らん。ただ言えるのは——、ヒュプノスのメモリ領域から何かが計算に間違つた解を与えているという事だ」

カーリー「ヒュプノスを切って！」

バベル「出来ない！ 分散コンピューティングの計算を受け止められるのは今はヒュプノスだけなんだ！」

デイジー「ああ——、アーク、お願いだから——」

虚空

リアル・ワールドが頭上に広がっている。

しかし光の軌道無きアークは、そこで停止——否、
ゆっくりと後退している。

アーク内

小春「ねー、なんか戻ってるみたい。ねー、ロップモン」

ロップモン「このアークなるものの力、ここまでか……」

ヒロカズ「じよっ、じよーだんじゃねーよっ。ここまで来て戻る

なんてそんなんアリかよっ」

ジエン「軌道が消えて、アークは行き先を失つたんだ……」

タカト「——アーク！ 聞こえる」

ジエン「タカト……？」

タカト「アーク、もう少しなんだよ。あと少しで、僕達は元の世界に戻る。助けて欲しいんだ。聞こえているでしょ？」

アークの目、反応した。

ギルモン「タカトの声、聞こえたみたいだよ！」

タカト「えっ？」

虚空

ゆっくりと降下していたアーク、最後部が量子分解

し、それが推進力となって急上昇を始める！

アーク内

ゴオオオオオオオ！ 激しい揺れに必死に堪える子ども達。

ジェン「小春ンンン！ しっかり掴まってて！」

ケンタ「わあっ！ 後ろからアークが消えていく！」

タカト「！ そんな！」

ヒロカズ「突入するぜえええっ！！！」

ゴオオオオオオオ！ 機首に迫るリアル・ワールドの殻層！

中央公園／ちびっこ広場／夕方

麗花「（インカムに）——加藤樹莉さんのご両親だけ、連絡がとれません。おそらく松本にある奥様の御実家に——」

ルミ子「（走ってきて）どこっ？ どこなんですか？」

タカトらの両親達、毛布やポットを手に、あちこちに立って見回している。

麗花「（インカムの声を聞き）——来ます！ ここに現れます」
タカトの母「——タカト……（祈る様に）」

バチバチバチ！ 閃光——、そして、急速に現出するデジタル・フィールド。

巨大ジャンゲルジムの中から突き出してくる、アークの機首。

愕然と見守る両親達。

ズゴゴゴゴゴ。停止した。突き出た機首の下側ハッチが開き——、テリアモンが逆さまに顔を出す。

小春の母「！」

テリアモン「へへへー」

引っ込むテリアモン。

不安気に見守る両親達。手を握り合う松田夫妻。

タカトの母「！」

タカトの足が、出てきた。ジャングルジムを伝って降り立つ。

タカトの父母「(口々に)タカト!」

——以下音楽押して——

陸橋を走ってくる聖子。白い息を吐きながら——

聖子「(はあ、はあ、はあ——!)」

聖子が見たのは——再会。子ども達と、その親達。子ども達は毛布にくるまり、湯気のたつカップのミルクを飲んでいる。

こっぴどく両親に叱られているケンタ。

ガードロモンをどこかへ置いていけと言われ、同じポーズで困るヒロカズとガードロモン。

皮ジャンを羽織った留姫を抱いて号泣するルミ子。側でそつと留姫の髪を撫でる聖子。

「あれ?」と見回す留姫、レナモン。

独り、暗い道を歩き去っていくインプモン。

しゃがんで小春を抱きしめている母——。

ジエン「——(ごめんなさい)」

と、ジエン振り向く。

父・鎮宇、山木、ワイルド・バンチが集まってきた。タカトは、顔を真っ赤にして、しかし笑顔を両親に向けている。

唇を噛み、喜びに堪えている母親。父親は、拳で軽くタカトの頭を叩く。

と! スズスズ。アークが下がっていく。

山木「(『離れて!』)」

タカト「!」

無機的な『顔』が、デジタル・フィールドの霧の中へ消えていく——。

タカト「(『アーク!』)」

ギルモン「——(哀しみ)」

もう、そこにはただのジャングルジムしか、無い。

夜空に聳える、都庁舎。今は未だ、平和。

N 「ティマーたちの家は、避難区域となっていた。彼らは、

それぞれ両親と共に、東京から離れていった」

イメージ的に。手を振って再会を約束する――

ヒロカズとガードロモン、ケンタとマリナモン。

ジェンと小春、テリアモンとロップモン。

留姫とレナモン。

リョウとサイバードラモン（成長期）。

――音楽押しここまで――

一人、じつと都庁を見上げている、樹莉（留姫の皮ジャンを羽織っている）。それを見つめるクルモン。そこからやや離れたところで、ジャンパーを着たタカトと両親、それに山木の許に――

麗花「（来て）やっと松本と連絡がとれました――が……」

山木「どうした」

麗花「（樹莉を見て）あんな勝手な娘、帰りたいなら一人で来い、と……」

山木「（呻く）」

麗花「――多分、本心ではないと思うんですが……」

じつと樹莉を見つめていたタカト――、両親に向き

タカト「――僕、送ってくる」

タカト父「え……」

タカト「加藤さんを一人でなんて、僕行かせられないんだ」

タカト母「――（一瞬、困惑）」

タカト父「しかし――」

タカト母「――（笑みを作り、夫の肩を叩き）いいじゃない。もうどこか判らないとこにいるんじゃないんだし」

タカト父「（嘆息）……。男はつらいもんだよな」

タカト母「ちゃんと送ったら、必ず逗子のおばさん家に来るのよ！

判った！？」

タカト「うん！ ありがとう！」

タカト父「ギルモンパンは、またお預けだな（苦笑）」

ギルモン「うん、でも楽しみにしてる！」

山木「松本か……。新宿駅周辺の交通機関は今止まっている。待ってくれ」

山木、モバイルPCを出して、情報を探す。

タカト「――」

三鷹駅／深夜

山木「（オフ）中央本線なら三鷹から行ける。急行アルプスの夜行だ」

ホームに止まっている特急アルプス。

タカトとギルモン（頭上にクルモン）、駅弁を抱えてホームを走り、飛び乗る。

中央公園（カットバック）

山木「（サングラスをとり、笑顔で）無事で、良かった」

三鷹駅

発車のベルとアナウンス。

駅員アナウンス「間もなく信濃大町行き急行アルプス、発車いたします。ご乗車の方は――」

ぷしゅー。ドアが閉じ、滑り出すアルプス。

アルプス車内

車内に入るタカトたち。

ほぼ無人の車内の一席に、樹莉が座り、窓の外を見つめている。

タカト「ふう。駅弁買ってきたよ」

ギルモン「ギルモンたち、走ってばかりだねー」

タカト「（苦笑）ホントだね……」

樹莉は――、全く反応していない。膝の上で眠っているクルモン。

タカト「——加藤、さん……？」

樹莉、タカトの方を向く。

真正面に見つめられ、思わずどきまぎして目を落とすタカト。

樹莉「……」

タカト、ふと窓外を見る——。

タカト「——！」

暗い街に、点々とある明かり。ビルの広告塔——。

それらが流れていく。

タカト「——なんか——、やっと帰ってきた、って感じだね……」

暫く黙って、外を見ている彼ら。

東京都下

ふあああんん。 田園を走り抜ける夜行列車。

客室内

足元に置かれた、駅弁の空き包み。

ギルモンとクルモン、眠っている。

タカト「——加藤さんは——、いい子だよ……。とつても……」

タカト、樹莉をチラと見る。

樹莉はタカトをじっと見つめるだけ。

タカト「——加藤さん、と、こうやっていられるなんて、ホント

は夢みたいなお事……。なんだ……」

樹莉「——」

タカト「——加藤さん、よく僕に話しかけてくれた、でしょ……」。

僕、心の中で、ひよっとしたら、ホントは加藤さん、僕の事好きなのかな、って……」

樹莉「——」

タカト「（赤面）あつ、でも、それはそうかなって、想像しただ

けで、っていうか——」

樹莉「——」

タカト「——（真顔に戻って）そうじゃなくて——、僕が、加藤

さんの事、を……」

樹 莉「——」

タカト「ぼく、困るんだ……。 (涙が浮かぶ)一緒にテイマーになつて、デジタル・ワールドと一緒に冒険出来て、僕、とっても嬉しかった。でも、レオモンがいなくなつて、とっても悲しい気持ちにさせちゃつて……。僕、加藤さんを元気にリアル・ワールドに連れて帰らなきゃって、だから僕、加藤さんが、そんな、何も言わないみたいなの——、何も気持ちが無くなつちやつたみたいな、そういうの——、困るんだ！」

山岳部

暗い山稜。走り抜けていく列車の窓の灯。

車内/連結部

がこん。駅弁の包みをゴミ棄てに入れるタカト。

タカト「——」

ただ暗いばかりの、ドアの窓。

客車内

自動ドアを開け、タカト入つてくると——

タカト「あっ！」

車掌がギルモンを見て怯え、無線で連絡をしている。

ギルモン「(困った顔)あっ、タカトー」

タカト「(駆け寄り)あのっ！ちゃんと払いました！ギルモン大きいから、大人の料金！」

車 掌「そういう事じゃないでしょ。これ何？デジモンでしょ。」

よ。デジモンで危ないんですよ。」

タカト「違いますっ！ギルモンは、僕たちの街を守る為に戦つ

てくれたし——」

車 掌「あれはもつとでっかいデジモンでしょ。色しか似てない」

タカト「だから、あれはこのギルモンが進化した完全体でえ」

ギルモン「タカト、ギルモン進化した方がいい？」

タカト「だめえええっ！ こんなところで進化しちゃ」

ギルモン「ギルモン、またお腹すいてきちゃった」

タカト「(だーっ) ええーっ？」

車 掌「——なんかでも、呑気な奴だねえ……」

タカト「——そうなんです！ ギルモンは——」

車 掌「(嘆息) ま、いいか……。見なかった事にすれば」

タカト「——(笑み) ありがとう！」

車 掌「えっと、松本までだっけ？」

タカト「はいっ」

車 掌「(微笑) 良い旅を(帽子のつばに指を置き)」

去っていく車掌。

タカト「ふうう……」

クルモン「タカト、モン……？」

タカト「え……？ (ハッ)」

樹莉、立ち上がって目を見開き——

樹 莉「(ブツブツと抑揚無く)——信州は心の古里旅の思い出

づくりをチケットはインターネットでは非ご予約を——」

その視線の先を見るタカト。

ドア脇に貼られた観光ポスター。

タカト「(暗然)——加藤、さん……」

松本駅改札口/未明(四時三十一分着)

見回しながら出てくるタカト達。と——、暗がりに

じっと腕を組んで立ち、樹莉を見つめている中年の

男——樹莉の父親、肇。

タカト「(あ……) こ、こんにちは……。あの、ぼく——」

松本市内(中町通り〜東宝セントラル近く)(以下音楽押し)

肇、タカト、樹莉、ギルモン(の上にクルモン)、

やや間隔を開け、黙って歩いていく——。

城下町の裏道。土蔵作りの店も、未だ閉まっている。

城下町／樹莉の義母の家

「樋口」の表札の、古い民家。

樹莉の義母、樹莉に泣きながら話しかけている。

むすつとしていた父親。未だ眠くて目をこすっている幼い弟。

タカト、おじぎをする。ギルモンも。

タカト、樹莉を見つめる。

樹莉は、義母の家を見回しているばかり。

タカト「——（寂しそう）」

松本駅待合室／早朝（五時頃）

足どり重く、歩いてくるタカト、そしてギルモン。

タカト「——（あ）——クルモンは……（見回そうとすると）」

ギルモン「タカト、ねえ、あれ何？」

タカト「え……？」

ギルモンが指している方に人ばかり。

近づく、大型液晶ディスプレイにTV中継画面。

タカト「——（すぐに認知出来ない）——嘘だよ……」

映っているのは——、新宿新都心。それは——

新宿新都心

タカト「（オフ／悲痛）こんなの嘘だよ……!!」

都庁を中心に、超高層ビル群が、赤黒くつねるデ・リーパーの泡に侵されていた——。

以下次回